

# 理数ワンダーランドひとくサイエンスショーは、サイエンス・コミュニケーションを重視したプログラムを目指します！

## ひとくサイエンスショー

今回は、2月17日(日)に開催します。ワークショップ、展示ブースともリニューアルする予定です。ひとくは素敵なプレゼント“感動”をあなたにお届けします。

編集後記

新しい年を迎えました。さて、今年はどうなるのかな？私は去年、予防接種を受けていたにもかかわらず、インフルエンザにかかったり、長く通院生活が続きたりと健康面では、さっぱりでした。(日頃の行いか?)体が弱ると心も弱る。らしくない、気が弱い自分が見えたりする。健康第一、体が資本、今年こそは身も心も元気で健やかな一年でありますようにとお布団の中から願うのでした。そして、ひとく新聞愛読のみなさんにとって健やかで良い一年になりますように！

ひとく新聞20081113号

発行：兵庫県立人と自然の博物館

〒669-1546

兵庫県三田市弥生が丘6丁目

079-559-2001(代表)

発行日：2008年1月3日

編集長：小林美樹

編集協力：生涯学習課・出版支援担当

印刷：ウニスガ印刷(株)

「オール1の落ちこぼれ、教師になる」の著者、宮本延春さんは、23歳のとき彼女から手渡された一本のテープ「NHKスペシャル アインシュタイン・ロマン」に「感動」し、物理学に興味を持つようになったと述べています。それまでの彼は、小学校のいじめで学校嫌いになり、中学1年生の成績はオール1、わかる英単語はbookだけ、九九も2の段までしか言えない学力で、中卒後は見習い大工を経て、ミュージシャンを夢見てフリーターをしていました。24歳で定時制高校へ入学、猛勉強の末、難関国立大学に合格、大学院まで9年間物理学を研究し、今は母校の教壇に立っています。

人と自然の博物館では、11月11日(日)に「見て!知って!体験して!理科は“感動”だ!」を合言葉に、小学校低学年にも、楽しく興味を持てる科学の実験・工作イベント「理数ワンダーランドひとくサイエンスショー」を開催しました。当日はワークショップ9、展示ブース10の出展がありました。講師は県内の小・中・高・大学の

教員およびひとくの研究員です。それに高校生がサポートスタッフとして加わりました。当日は、開館前から親子連れの行列ができるほどで、各出展に、延べ2,000人が参加する盛況ぶりでした。ひとくサイエンスショーは、平成15年から県教委の理科教育推進事業としてスタートし、昨年度からは理数教育推進事業(ダ・ヴィンチ・プラン)によって実施されています。今年で5年目を迎えますが、実施前から問い合わせの電話が入るなど、認知度も高まってきているようです。

文部科学省の中央教育審議会では、今後の理科教育の方向性として、「言葉と体験」をキーワードにあげています。今までは体験活動のみに終始し、体験を通じて子どもに習得させるべき知識、技能など育成すべき力を教師が見失っていることが指摘されており、今後は、子どもが言語を通じて体験を経験とし、知を構築していく学習活動が求められているのです。

今年、「サイエンス・コミュニ

ケーション」を重視したプログラムを目指し、ワークショップの時間を昨年までの60分から90分に延長する試みにトライしました。今回のワークショップは、「おいしい火山実験」、「煮干しのお腹のプランクトンから海の世界を考えよう」など、講師の専門性を生かした創意工夫、チャレンジスピリットに富むものが多く、各教室は時間オーバーするほどの熱気に包まれました。

(谷川直也：生涯学習課)



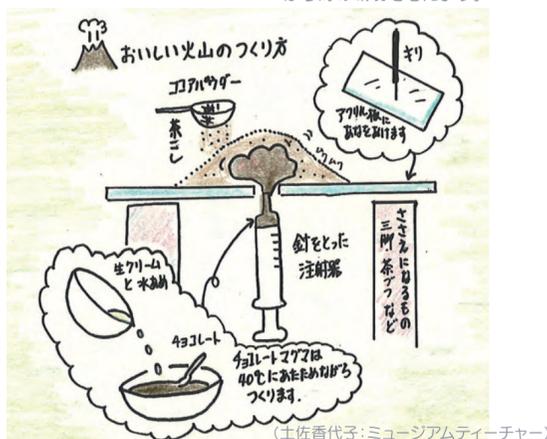
↑「ステレオ写真のふしぎ」



↑「おいしい火山実験」



↑「煮干しのお腹のプランクトンから海の世界を考えよう」



(土佐香代子：ミュージアムティーチャー)

## 共生のひろば

自然やまちづくりに関すること、なんでも発表会

日時：2008年2月11日(日・祝) 10時～17時

場所：兵庫県立人と自然の博物館

聴講者募集中！(締め切り：2008年1月31日)

お申し込み・お問い合わせは下記まで

お申し込みは「共生のひろば聴講希望」と明記し、住所・氏名・電話番号等の連絡先をご記入の上、下記まではがき、Fax、またはE-mailでお申し込みください。

観覧料のみでご聴講いただけます。

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目

兵庫県立人と自然の博物館 生涯学習課

電話：079-559-2003 Fax：079-559-2033

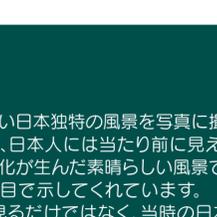
E-mail：seminar@hitohaku.jp



## 共生の風景

これらの写真は、すべて120年前に出版された写真集「JAPAN」(1888年出版)のもので、江戸時代から明治のはじめの日本が写っています。もちろん当時は白黒写真しかありませんでしたが、日本の絵師が色を付けているので、とてもリアルなカラー写真に仕上がっています。

- ① TOKAIDO NEAR HATA (東海道の幡多のあたり) 日本を代表する街道だが、当時の旅のきびさがわかる
- ② FERRY BOAT (渡し船) 洪水になると、川沿いの宿場町は人が溢れんばかりに賑わった
- ③ ON THE CANAL OSAKA (大阪の堀の上から) 「八百八橋(はっぴやくやばし)」とうたわれた大阪の堀と橋の風景
- ④ PLOUGHING (耕作) 牛は有名だが、馬も使って田んぼをおこしていたことがわかる
- ⑤ IKAO (伊香保：群馬県) 関東平野の北端にあり、草津温泉などに続くことから活気があった宿場町
- ⑥ FUNERAL PROCESSION (葬式の列) おそらく有力者や高僧の葬儀と思われる
- ⑦ COOK HOUSE (台所) 広い土間にある台所で料理していたことがわかる
- ⑧ 無題 川と一体となった家屋で、のどかに釣りを楽しむ人も写っている
- ⑨ MINOBU (身延：山梨県) 東海道から分岐する「身延道(みのぶみち)」にあった宿場町
- ⑩ HAKONE (箱根：神奈川県) 日本を代表する宿場町で、箱根の山越えや温泉、山岳信仰などで賑わった
- ⑪ 無題 日本の伝統的な土木技術「蛇籠(じゃがご)」。隙間が多いため、生き物のすみかや植物が生える場所となった
- ⑫ 無題 江戸から明治にかけては、まだ街路樹がなかったため、家屋からはみ出す「堀越しの緑」が美しい町並みをつくっていた。(赤澤宏樹：自然・環境マネジメント研究部)



**古写真にみる共生の風景**  
ひとくには、江戸時代から明治時代にかけて撮影され、モノクロ現像に絵師が彩色した「横浜写真」と呼ばれるものがいっつか収蔵されています。その中でも、最も美しいとされる一つ「JAPAN」(正式名：“VIEWS & COSTUMES OF JAPAN” 1888年刊行)には、日本にかつてあった美しい風景が多く掲載されています。外国人写真家は、自分の国

にはない日本独特の風景を写真に撮っています。それは、日本人には当たり前に見えても、日本の風土や文化が生んだ素晴らしい風景であることを、外からの目で示してくれています。「今の風景と違う」と見るだけではなく、当時の日本人の気持ちや生活を想像しながら見ると、本当の風土や文化が理解できるかもしれません。

